水田で稲わらが寄ってしまった場合の対処について

令 和 5 年 9 月 1 2 日

山武農業事務所改良普及課

先日の台風第 13 号の接近による大雨により、管内の水田において収穫後の稲わらがほ場の一部に寄っている状態が多く見受けられます。また、雨水の集中しやすい形では周囲のほ場の稲わらが畦畔を越えて流入し、水田の一部に多量に堆積しているほ場も見られます。

偏って堆積している稲わらをそのまますき込むと、稲わらが多い部分の有機物が分解しきれずに翌年まで残るため、田植え以降に気温が上昇してから有機物の急激な分解が起こり、有害なガスが発生することがあります。ガスが発生すると水稲が生育障害（ガス害）を起こすことがあるため、以下の対策を参考にして、早めに対策を施しましょう。

写真　稲わらが寄ってしまった水田

① **他のほ場から稲わらの流入がない、又はあっても少ない場合**

偏った稲わらを**できるだけ均等に分散**させて耕うんします。

② **他のほ場から稲わらの流入が多い場合**

過剰な稲わらをほ場外（畦畔など）へ運び出します。運びきれない場合は**ほ場 1 枚分程度（500～800kg/10a）**までであればほ場内へ分散させ、耕うんします。

いずれの場合も、耕うんはできるだけ早期に行い、10～15cm の深さで耕うんすることで有機物の分解が促され、翌年のガスの発生を抑えることができます。また、耕うんの際に石灰窒素を **20kg/10a** 散布してすき込むことでも有機物の分解を促進することができます。石灰窒素は窒素分を含む資材なので、肥沃な土壌で使用する場合は倒伏に強い品種を翌年に栽培することをおすすめします。

また、田植え後にガス害による生育不良が起きてしまった場合は、一度落水して田面を軽く干すことで土中に新鮮な空気を入れ、稲の回復を促しましょう。